

## 1. 主題設定の理由

音楽科の学習活動では、聴く活動の中で「知覚・感受する」ことが重要である。それを基に「A表現」においては、生徒は自分自身と向き合ったり、仲間と交流したりすることで、さまざまに試行錯誤しながら、自らの思いや意図が広がった表現を実現していく。また、「B鑑賞」においては、仲間と批評するなどの活動を通して、自ら価値判断し、音楽のよさや美しさを味わって聴くことができるようになっていく。

このように、音楽の授業では、「A表現」の学習においても聴取活動を行うことが生徒の思考を促したり深めたりし、音楽表現の工夫につながるということが重要となる。歌唱であれば、曲に対する自分のイメージを膨らませたり、他者のイメージに共感したりしながら表現の工夫を考える。生徒は音楽を形づくっている要素の働きを基に音楽の特徴を捉え、「どのようにしたら、自分の思いや意図が聞き手に伝わるように表現できるのか」など、よりよい表現を求めて工夫するようになる。創作では、身近な楽曲を聴いたり、ほかの生徒の作品を聴いたりすることで、自らの作品づくりのためのアイデアが生まれ、自分の作品を見直す視点を見出したりすることができる。聴取活動を授業の中に効果的に位置付けることで、相手が伝えようとしている表現の工夫を知覚・感受する力の向上も期待できる。音楽を表現する技能だけでなく知覚・感受する力も合わせて育むことで、生徒の思いや意図は深まり、さらなる音楽活動の充実を図ることができると考えた。

本研究では、生徒が思考・判断・表現する力を高めることにつながる、効果的な聴取活動の在り方を探すことを目的とする。そのために、歌唱・器楽・鑑賞の各領域や分野を関連付けて取り組むことのできる授業を構成し、聴取活動をどの場面でもどのように仕組めば効果的であるかを明らかにしていきたい。

## 2. これまでの研究のあゆみ

令和2年度は、「聴取活動による音楽的な感受を基にした、思考、判断、表現力等を育む授業づくり」という主題を設定し、2年計画で研究を行った。1年目である令和2年度は、音楽科で育成する「創造性」について整理するとともに、「主体的な学び」のプロセスモデルの実践及び「主体的に学習に取り組む態度」の評価について研究を進めた。「我が国の伝統音楽」を教材とし、箏の奏法を試したり聴いたりして、知覚・感受を深めながら箏の音色の特徴を捉え、基礎的な奏法を身につけ、弾き方による音色の変化や、平調子による旋律を意識して演奏し箏の響きを味わう授業を行った。ゲストティーチャーを招き、「さくらさくら」の正しい奏法（特に、「押し手（後押し）」、「引き色」、「かき爪」、「割爪」の4種類）を学び、その知識や技能を生かし、前奏や後奏、その他フレーズとフレーズの間、イメージする音を取り入れ「自分だけのさくら」を試行錯誤しながら演奏する姿が見られた。箏の様々な奏法を目と耳で感じ、学ぶことで、音色の違いを知覚し、楽曲の旋律に合わせてどのような音色を響かせたいのかについて思いや意図をもつことができるようになった。基本的な奏法を習得したのち「自

分なりのさくら」を一人一人が表現することを試みた。資質・能力を見取るための工夫として、「振り返りシート」を題材ごとに一枚用意し、記入させ、日々の振り返り、積み重ねが目に見える形となり、自信につながった生徒も多くいた。しかし、工夫を言葉や楽譜に書き示すことへの課題が残った。思いや意図があっても、方法や技術がなければ難しく、記載されたものだけでは伝わりにくいものを感じた。2年目である令和3年度は、前奏や間をいかした伴奏を考え、自分たちのイメージにあった曲をつくる授業に発展させることにより、これまでの課題解決の一つである、音楽を形づくっている要素を学ぶ機会となると考えた。6月には歌詞や旋律、写真から風景をイメージしたり、変奏曲を聴いたり、いろいろな奏法を試し、また、仲間と音楽を表現することの楽しさを味わい、音楽を深めることで「創造性」「主体性」を育てようと思い、誰もが耳にしたことのある「きらきら星」のメロディーをアレンジしながら、実際にリズム、速さ、強弱などの違いによる変化を感じ取らせ、「自分なりの星を表現しよう」という創作活動を行った。そのことにより、「ゆったりしたいから音符の長さを長くする」や「楽しい感じにしたいので、跳躍やスタッカートで表現する」など、思いを実現するための方法を模索することができ、改めて、様々な聴取活動の必要性を感じた。11月は、二人一組になり、旋律担当と、前奏、後奏、間を工夫する担当の両方を経験させた。音を合わせることや、音色、旋律、リズム（間）などの音楽を形づくっている要素を感じ、音と音とのコミュニケーションである合奏を行った。生徒が主体となり、学習を振り返る中で、自らの変容（感じ方や考え方）や成長に気がつくことにより、我が国の伝統音楽に親しむ気持ちを育てることにつながった。

### 3. 全体研究との関わり

全体研究主題である「新たな価値を創造する生徒の育成」における「新たな価値を創造する生徒」とは、「創造性」を身につけた生徒であるとされ、「創造性」は「自ら課題を見出し、その解決に主体的に取り組もうとする態度」にあると考えられている。（表1）

知識及び技能	課題の解決に必要な知識・技能
思考力、判断力、表現力等	自ら見出した課題の解決に向かって、新しい知見や技術革新を取り入れながら、これまでに得た知識や経験を結び付け、新たな意味や考え方を見出す思考力、判断力、表現力
学びに向かう力、人間性等	自ら課題を見出し、その解決に主体的に取り組もうとする態度

（表1）附属中「創造性」の整理

そして、次の2点に重点的に取り組みたい。

- (i) 生徒自身に「主体的な学び」のプロセスモデルを意識させながら、学びに向かわせる手立てについて明らかにすること。
- (ii) 「創造性」のうち、「思考力、判断力、表現力等」として整理された「自ら見出した課題の解決に向かって、新しい知見や技術革新を取り入れながら、これまでに得た知識や経験を結び付け、新たな意味や考え方を見出す思考力、判断力、表現力」を育成する手立てについて「知識及び技能」「学びに向かう力、人間性等」の育成との関連を意識しながら明らかにすること。

## ① 音楽科における「主体的な学び」のプロセスモデルの実践

授業づくりの要素として、「問いを持つことのできる題材」「題材の導入の工夫」「ワークシートの工夫と生徒への働きかけ」が重要であると考え、生徒の実態を把握し、それに合った題材を検討することで精選される「問いを持つことのできる題材」により、生徒自身が問いをもち、その解決に向けて主体的に取り組むことができるようになる。生徒がより感性を豊かにし、主体的に音楽の学習活動に向き合うためには、生徒が興味・関心をもてるような題材設定と授業での発問や教材の工夫が求められる。

音楽科における「主体的な学び」のプロセスモデルと学習過程

	学習過程	学習活動	エンゲージメントの高まり（生徒の姿）
目標設定	課題を見つける	既習の知識および技能を基に、課題を決定する	・挑戦の感覚、知的好奇心、学習への期待感・高いレベルの関心をもつ課題
方略計画	学習を見通す	解決の見通しをもち、計画を立てる	・ゴールを設定し、既習経験を生かしながら、課題解決のための学習方略を考える
遂行 振り返り	課題解決のために必要な知識や技能を習得する	・様々な方法を試し、解決方法を探る ・工夫して表現する	・計画に基づき学習遂行する ・個人やグループでの学習活動に意欲的
方略調整	課題解決に向けた実践	個人・交流活動を通し、知識技能をさらに深める	必要に応じて、交流活動で得たことを修正（取り入れる）
全体の振り返り	実践活動の評価・改善	気づきや発見を明確にし、次につなげる	・学びの質や成果を振り返る ・楽しさ、有能感、充実感、達成感をもてる

## ② 音楽科で育成する「創造性」について

「音楽的な見方・考え方」について目を向けると「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づく要素とその働きの視点で捉え、捉えたことと、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などを関連付けること」「(前略) 音楽的な見方・考え方を働かせた音楽科の学習を積み重ねることによって広がったり、深まったりするなどし、その後の人生においても生きて働くもの」と平成29年告示学習指導要領に解説されている。「中教審答申」では、感性の働きについて「特に重要な「感性」の働きは、感じるという受動的な面だけではない。感じ取って自己を形成していくこと、新しい意味や価値を創造していくことなども含めて「感性」の働きである。また、「感性」は知性と一体化して創造性の根幹をなすものである。このため、子供たちの創造性を育む上でも、感性を働かせ育む芸術系教科・科目がこのことを担っている。」としている。

本校音楽科で捉える「創造性」は、様々な音楽に触れ、楽曲の特徴や、その曲想をもたらしている諸要素に焦点をあてながら、生徒が音楽の多様性を感じ取り、理解することを繰り返したり、作品に込められた作曲者の思いや意図、生き様、時代背景などを知ったりすることにより、新たな見方、考え方、聴き方や感性を働かせる力である。生徒に育成したい資質・能力は、具体的な生徒の学びの姿として示されて初めて、授業実践に生かされると考える。今後は、各教科における「創造性」の捉えを具体的な生徒の学びの姿として示すことが必要である。このことから、全体研究で目指す「新たな価値を創造する生徒の育成」を育成するために、音楽科で重視すべきことは、「感性を働かせて鑑賞し、多様な表現技法を身につけさせる」ことであると考えた。様々なジャンルの音楽を鑑賞したり比較聴取したりする

活動を通して、ふさわしい表現方法を考えることができる力を身に付けさせたい。

感性が働いている状態について、音が感性の働きなくして、音楽の学習活動は成立しない。生徒がより感性を豊かにし、主体的に音楽の学習活動に向き合えるためには、授業での発問や教材の工夫が求められる。感性を働かせるために、生徒が意欲的に活動することのできる「音や音楽との出会い」も大切にしていきたい。そして、音楽科の研究主題との関連を意識し、聴取活動による音楽的な感受をもとに、感性をより働かせる学習過程を授業において実現することを目指して研究を進めていきたい。

#### 4. 今年度の研究について

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して「音楽的な見方・考え方」を働かせ、知識や技能を得たり生かしたりしながら、自分の表現したいことや考えたこと、理解の状況などを自ら把握し、学習調整しながら主体的に学習に取り組むことで、新たな価値を生み出すことができる生徒の育成を目指したいと考えた。生徒が既存の知識や技能を活用して音楽活動を行う中で、さらに新たな知識や技能を得ることや、意欲的に音楽活動に取り組むことで豊かな情操を養い、感性や「思考力、判断力、表現力等」を高めることにもつなげていきたい。生徒は、日々様々な音楽を聴き、自分なりの楽しさ、心の安らぎやよりどころをみつけていると思う。しかし、世の中には、あらゆるジャンルの曲があり、楽器があり、作曲家がいて、演奏者がいて、未知なる音楽があふれている。様々な音楽との出逢いや、作曲者の音楽に込めた思い、人生観、歴史的背景などのつながり等を新たに知る中で、音楽に対しての思いが強くなり、それこそが「新たな価値を創造する生徒の育成」につながることを検証したい。そのためには、探究的な題材を設定し、生徒が主体的に、自分たちの力で思いや意図をもって音楽表現をすることができるように仕組んでいきたい。全体研究3年目である今年度は、これまでの1、2年次の研究の成果と課題を整理し、授業実践のありかたについてまとめていく。

#### ○研究の計画

1年次	○「主体的な学び」のプロセスモデルの実践 授業づくりの要素として、「問いを持つことのできる題材」「題材の導入の工夫」「ワークシートの工夫と生徒への働きかけ」であると考え、生徒の実態を把握し、それに合った題材を検討 ○「自ら見出した課題の解決に向かって、新しい知見や技術革新を取り入れながら、これまでに得た知識や経験を結び付け、新たな意味や考え方を見出す思考力、判断力、表現力」を育成する聴取活動について「知識及び技能」「学びに向かう力、人間性等」の育成との関連を意識しながら明らかにすること。
2年次	1年次の授業改善の方法について工夫する。
3年次	1,2年次の研究成果を整理し、授業実践のありかたについてまとめる。

内容
①それぞれの違いや共通点などを学ぶことを通して、思考力・判断力・表現力をより高めることのできるような題材設定を行う ・主体的に意欲をもって学習ができるような題材や授業の開発
②主体的な学びのプロセスモデルの作成 ・ねらいや学習内容が整理できる言語活動やワークシートの工夫

- ・ PDCA サイクルの中で、より主体的に学習ができるような授業づくり
- ③ 授業により育まれた資質・能力の見取りについての工夫と実践を重ねる
- ・ 学習カードの記述、仲間との交流による観察、ICT機器を活用し、生徒の表現活動の記録や分析などを活用した評価方法や評価規準の作成

#### ○音楽科で身につけさせたい資質・能力について

新学習指導要領では、全ての教科・領域等において「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で資質・能力の育成を目指すことが示された。本校の音楽科では、三つの柱の中でも特に「思考力、判断力、表現力等」を高めることを研究の目的としている。「思考力、判断力、表現力等」は、それ単独で高められるものではなく、他の二つの柱と密接に関わりあっている。新学習指導要領解説では、音楽的な見方・考え方を「音楽科の特質に応じた、物事を捉える視点や考え方であり、音楽科を学ぶ本質的な意義の中核をなすもの」として次のように示している。「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などに関連付けること。」

このことから本校音楽科では、「音楽的な見方・考え方」を働かせ、「思考力、判断力、表現力等」を高める授業の構成を目指していく。その方策として、聴取活動による音楽的な感受の場면을効果的に取り入れることで、生徒に音楽の多様性を理解させるとともに、自分たちで音楽表現を創意工夫できる力を身につけさせたいと考えた。

#### ○資質・能力を見取るための工夫

授業では、生徒自身が毎時間、自己の学習を振り返るための「振り返りシート」を活用している。知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた「粘り強い取組を行おうとする側面」と、その粘り強い取組を行う中で「自らの学習を調整しようとする側面」という二つの側面を生徒の記述から見取る。授業の中で音楽を聴く時間や実技にかかる時間を増やし、生徒の資質・能力を育成することができる授業づくりを組み立てる必要があると考えた。また、「振り返りシート」に書く項目を「わかったこと」「感じたこと」の二項目にして、具体的に記入をさせることで、生徒の学習における定着状況の把握だけでなく、教師の指導の改善を行うことにも繋げることができる。

また、映像や音声を使った見取りもしていきたい。振り返りシートやワークシートだけでは見取りきれない生徒のつぶやきや、技能の変化、会話の様子などは、映像や音声で残すことが有効であると考えられる。ロイロノートを使用し、動画で自分たちの表現している姿を残し、各自で成長の過程を目や耳で確認したり仲間の姿と比較したりすることで、新たな発見や課題解決につなげることができると考えた。

## 〈引用・参考文献 等〉

- ・中学校学習指導要領 文部科学省 H29
- ・中学校学習指導要領解説 音楽編 文部科学省 H29.6
- ・評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（中学校 音楽）  
H23 国立教育政策研究所 教育課程研究センター
- ・「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 音楽編 文部科学省  
R2.3 国立教育政策研究所 教育課程研究センター
- ・山梨大学教育人間科学部附属中学校研究紀要 H23～27
- ・山梨大学教育学部附属中学校研究紀要 H28～R5
- ・中央教育審議会 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」 H28.12 文部科学省
- ・中学校新学習指導要領の展開 音楽編 H29 副島和久編著 明治図書
- ・中学校教育課程実践講座 音楽 H30 宮下俊也編著 ぎょうせい
- ・中央教育審議会 「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」 H31 文部科学省
- ・中学校新学習指導要領「音楽の授業づくり」 H30 加藤徹也・山崎正彦著 明治図書出版
- ・「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料  
R2 国立教育政策研究所 教育課程研究センター